様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２７４２

研究課題名（和文）市民性涵養の関係性モデルを軸とした地域参加学習カリキュラムと教授法の開発

研究課題名（英文）Development of Curriculum and Pedagogy for Community Engagement Based on Relational Models of Citizenship Cultivation

研究代表者
山口　洋典（Yamaguchi, Hironori）

立命館大学・共通教育推進機構・教授

研究者番号：９０４４９５２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は教育学、社会開発学、地域社会学を専門とするチームにより、参加型学習における問題解決活動と教育実践の相即への理論的・方法論を体系的に整理し、実証したものである。その際、研究代表者が展開してきた社会心理学の観点からのインター・コミュニティ・デザインについての知見を土台にした。
　本研究では学習者個人に照射せず、学びのコミュニティを構成する集団の最適化のため、各々の主体の自己創出を重視した質的研究として展開した。具体的には、米国の教育実践から構築されたSOFARモデルを積極的に援用して、学生の市民性を涵養する規範、実践、手順に注意を払ったカリキュラムの設計と評価の指針を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究成果は、世界的には教授法の一つとして確立されたサービス・ラーニングについて、浸透の途上にある日本においてその内容と意義について明快に整理することができた。それらは国内での論文・学会等に加えて国際学会での発表を通じて公表を重ねてきた。
　また、実践的には立命館大学サービスラーニングセンターによる全学教養科目に還元されており、専門科目との接続を前提とした一般教育の水準を超えて、文化的な多様性に配慮した地球市民の育成に貢献できている。加えて、それらの教育実践の成果や課題を日本サービス・ラーニング・ネットワーク等を通じて共有し、新たな実践的研究への効果的な連携・接続を図ることができた。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the synergistic effects of problem-based learning and active learning in service-learning programs. Under both theoretical and methodological approaches, the research project developed the action research at Ritsumeikan University. The team was formed of interdisciplinary members from education, social development, and regional sociology. In doing so, the team's representative led the findings as inter-community design from a social psychology perspective.
Influenced by COVID-19, this study was expanded as a qualitative research project, focusing on self-actualization to realize citizenship for responding in the learning community. Specifically, the SOFAR model, constructed from U.S. pedagogical practices, was actively adapted to clarify curriculum design and assessment guidelines, paying attention to norms, habits, and procedures for cultivating citizenship.

研究分野：高等教育学

キーワード：サービス・ラーニング　体験の言語化　SOFARモデル　リフレクション　大学地域連携　アクティブ・ラーニング　Problem-Based Learning　学びのコミュニティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2017 年度まで、研究代表者は科学研究費助成（若手研究 B）により、社会心理学の一分野であるグループ・ダイナミックスの観点からインター・コミュニティ・デザインのあり方に迫ってきた。特に立命館大学サービスラーニングセンターによる正課科目を通した被災地の復興支援プログラムを事例に、分野横断的に実践知の形式知化に努めた成果は、日本グループ・ダイナミックス学会や日本災害復興学会など、国内学会はもとより、3 年間連続して国際サービスラーニング・地域貢献学会（International Association for Research on Service-Learning and Community Engagement: IARSLCE）などで公表してきた。

国際学会での発表を重ね、サービス・ラーニングの教育法に関する資料収集と事例検討を進める中、教育実践の現場における適切な関係構築にはインディアナ大学-パデュー大学インディアナポリス校（IUPUI）のサービスラーニングセンター長の創設時のセンター長であるロバート・ブリングル（Robert G. Bringle）らによって構築された「SOFAR モデル」の援用が妥当であることが明らかとなった。これは Student, Organization, Faculty, Administrator, Residents、つまり学生（Students）、受入団体（Organizations）、教員（Faculty）、特に執行部のスタッフ（Administrators）、住民（Residents）、それらの相互関係を適切なものにしないと、よい学びの場は生まれないとする考えである。

サービス・ラーニングは、大阪大学の小貫有紀子が 2014 年に論文「米国学生支援における学習者中心主義への転換要因とアセスメントのインパクトについて」で指摘したように、米国における「学習者中心主義への転換」の時代に構築されてきた。これは、デイヴィッド・リースマンが指摘した「消費者主義」への対応もしくは反動としても捉えられるが、サービス・ラーニングの普及は、全米大学・カレッジ協会（AAC&U）が 2012 年に改めて各大学に呼びかけたように、大学と地域社会との関わりを通して「民主的価値観、理想、プロセスの担い手」としての自覚と責任を学習者たちが得ることを例証し、民主主義のために市民性を涵養することの重要性の証左となった。

一方、日本におけるサービス・ラーニングは、研究代表者の勤務校も例外なく、文部科学省の競争的資金の導入とかかわって、組織的かつ急速に導入されてきている。その際、例えばメリーランド大学のバーバラ・ジャコビー（Barbara Jacoby）による「省察と互恵」の理念が尊重されたカリキュラム設計がなされているものの、教育者によって業（わざ）が授けられるもの、といった伝統的な学習観が、学習者中心の教育の実現を困難にさせてきた。

しかし、ティーチングからラーニングへの転換が進む日本の高等教育において、中等教育までにアクティブラーニング型授業や経験学習型授業を経て進学してきた学習者と共に、どのような学習環境を設計・創出・維持・発展・解消するかは、個々の教員が実践から紡ぎ出した経験知のみに頼ることはできない。例えば、早稲田大学では 15 年にわたる教育実践をもとに「体験の言語化」の意義を体系的にまとめ、授業科目としても展開してきている点は、学びのコミュニティ・デザインへの理論的・方法論的アプローチの好例に挙げられよう。

また、18 歳選挙権の導入とあわせて、日本では中等教育までの段階で主権者教育が取り組まれる中、高等教育機関においては民主主義を支える担い手として市民性を涵養するシチズンシップ教育の重要性が一層高まる兆しが見られた。実際、溝上慎一による 2014 年の著書『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』に見られるように、既にその理念や導入の課題についての研究や、個別の授業での実践報告がなされていた。しかし、正課・準正課を横断して組織的に展開する上で「複数の場面における学習を架橋する」すなわち本研究の分担者の 1 人である河井亨が主張する「ラーニング・ブリッジ」を実現しうるカリキュラムやプログラムの開発・推進・評価の体系を整理する研究は例を見ない状況にあった。換言すれば、本研究課題の核心をなす学術的な問いは、正課・準正課を横断して高等教育機関が学習者の市民性を涵養するためには教員にどのような役割が求められているのかである。その際、学習者中心主義のもとで市民性を涵養するために、地域・組織・大学が関わる中で教員に求められる役割と行動規範の明確化は、質的転換を図る上で最重要の課題として捉えることができた。

２．研究の目的

本研究は、研究代表者が申請当時において 6 年にわたり従事してきた災害復興の現場での支援・被支援の関係を超えたコミュニティ・デザインの実践的研究、また 7 年にわたって取り組んできたサービス・ラーニングの教育実践をもとにした教育者と学習者のコミュニケーションに関する研究を土台として、参加型学習における問題解決活動と教育実践の相即への理論的・方法論を体系的に整理し、実証することを目的とした質的研究である。具体的には、これまで教育実践の分析に用いてきた「SOFAR モデル」を設計概念として用い、サービス・ラーニングを推進する上での関係当事者間に逐次生じる関係性の変化の動態を把握していくことで、地域参加活動の行為や問題解決への学習意欲などの態度がどのような作用・影響を与えるのかを実践的に解明することとした。それにより、これまで米国の様式に則って導入してきた教授法と、アクティブ・ラーニングに代表される能動的学修との共通性と差異を、哲学と政策とを結びつけつつ明

らかにすることを目指した。この意味では、未だ効果的な接続が図られていない能動的学修分野の高大連携分野への貢献も含め、多様な主体の連携によるプロジェクトマネジメントの企画と評価の設計概念に迫るものであり、多彩な現場への成果還元が期待された。

こうして明らかにしてきた社会心理学の観点から学びの場への構造的・状況的関心と、研究代表者による災害復興の過程における地域参加学習の知見に加え、本研究では教育学（河井）、社会開発学（秋吉）、地域社会学（宮下）の参画により、学びのコミュニティにおけるコミュニケーションの規範、習慣、手法について多面的に接近した。これにより、ルーブリック等の活用による学習成果に対する評価（教育学）、学習しあう場の形成及び参加プロセスの設計と支援（社会開発学）、フィールド参入・退去時に求められる手続きの整理（社会学）と、地域参加学習と問題解決活動の両面において、現代の日本社会の文脈（例えば、人口減少社会）に即した地域貢献型高等教育プログラムの体系を構築し、提示することとした。

３．研究の方法

この研究は主に立命館大学サービスラーニングセンターの教育実践を対象としたアクションリサーチとして展開した。実践の内容は逐次フィールドノーツにまとめるとともに、各種分析対象のデータについてはその取り扱いについて個人情報保護に留意すべく匿名化した上で積極的に共有・公開していくこととした。

具体的な方法としては、まず、文献資料に基づいて多様な実践を分析していくことに加え、教育実践の資料収集と研究会活動の実施を通して、サービス・ラーニングを中心とした能動的学習のための学習資料を収集・整理・制作・提供することとした。それにより、立命館大学サービスラーニングセンターのホームページにリソースセンター機能を実装していくことが学術的・社会的な意義を追求する上での有効な方法になると想定した。そうして学内、学外との関係構築を深めつつ、SOFAR モデルを用いて能動的学習の構成要素の相互関係を分析し、プログラム開始時の理想、開始当初の状態、中間段階での構造と終了時を見越した理想の状態、終了時の構造を比較し、地域・テーマ・教員や受入担当者の特徴に応じた特徴を明らかにすることにした。

まず初年度である 2018 年度は、学生の学びと成長の契機を明らかにすべく、徹底して SOFAR モデルを用いて、現場で生滅流転する関係性に迫ることとした。研究会活動では河井が幹事となり、関係性モデルを軸とした分析結果について積極的な意見交換を図る。リソースセンター機能の充実のため、国内（日本サービス・ラーニング・ネットワーク／Japan Service- Learning Network: SLNJ）と海外（IARSLCE）の動向に着目した。

2019 年度は、SOFAR モデルの援用という、能動的学習の関係性モデルを軸とした比較分析の結果をもとに、カリキュラム設計と評価を進めていった。関係性モデルで明らかにした現場の特徴をもとに、体験が言語化されたレポートを分析対象として、ノースキャロライナ州立大学のサラ・アッシュ（Sarah. L. Ash）とサービス・ラーニングに関するコンサルティングと出版事業を展開する PHC Ventures の代表で IUPUI のパティー・クレイトン（Patti H. Clayton）による「DEAL モデル」をもとに、何が語られ、何が語られていないのか検討した。研究会活動では宮下が幹事となり、正課・準正課での市民性の涵養により到達すべき段階について地域のエンパワーメントの観点からルーブリックを作成する。また、IARSLCE のネットワーキングにより、海外から研究者を招聘し、国際シンポジウムを行う計画とした。

2020 年度は、山口が幹事となった研究会活動により、研究代表者が 2017 年度に滞在したオールボー大学との共同研究により、サービス・ラーニングと PBL（Problem Based Learning）の教授法との比較を行う予定とした。それにより教員の役割を抜本的に見つめ直し、役割の再定義を行うこととしたものの、COVID-19 の影響によりオンラインでのネットワーキングを中心として、それまでの成果の積極的な公表に力点を置くこととし、国際学会での発表等に注力していくこととした。

2021 年度は、秋吉が研究会の幹事となり、特に国際サービス・ラーニングに焦点を当てつつ前年度までの内容を深化させる。そして、JSLN や IARSLCE での研究発表で成果を問う。

そして 2022 年度は議論をまとめあげるべく、研究会活動に注力することした。COVID-19 の影響の長期化により、当初予定していた総括シンポジウムもオンラインにて実施する方針に切り替えた。

４．研究成果

5 年間にわたる研究を経て、本研究では学生の市民性を涵養する規範、実践、手順に注意を払ったカリキュラムの設計と評価の指針を明らかにした。各年度の成果は以下のとおりである。

2018 年度は、文献資料に基づく多様な実践の分析に加え、教育実践の資料収集を通して、サービス・ラーニングを中心とした能動的学修のための学習資料を収集・整理・制作・提供する（リソースセンター）機能の実装に向けて必要な事柄を整理した。そのため、国内（Service Learning Network Japan：SLNJ）と海外（IARSLCE）の動向に着目し、人的ネットワークの維持・発展に努めた。5 月には研究代表者を含む 2 名が SLNJ の年次大会（於：高知大学）に参加、7 月には研究代表者により IARSLCE（於：米国・JW Marriott New Orleans）にてサービス・ラーニングの学習内容の省察に焦点を当てたポスター発表を行った。

また、本研究は立命館大学サービスラーニングセンターのボランティア・サービスラーニング（VSL）研究会との効果的な連動のもと、国内外の動向について改めて関心と理解を深めること

が企図されている。そのため、研究代表者による 2017 年度におけるデンマークでの滞在型比較研究の成果還元（5 月）、立命館大学がびわこ・くさつキャンパス（BKC）を置く草津市役所（滋賀県）の協力により周辺自治体を含めた地域連携の展望に関する意見交換を学外で実施（8 月）、日本における唯一のサービス・ラーニングの全国ネットワーク機関の代表者による話題提供（11 月）と、幅広く場を創出してきた。

さらに、各種学術会議での発表機会も得た。2019 年 3 月には早稲田大学での言語文化教育研究学会第 5 回年次大会にてパネルディスカッションにおいて、SOFAR モデルなどを援用した能動的学習の構成要素の相互関係に関する分析視角を提示した。加えて、研究代表者が理事を務める国際ボランティア学会では、学会誌（第 19 号）において「主体的な学びを拓くボランティア学」を企画し、最新の動向をとりまとめた。

2019 年度は、研究計画調書に挙げていた国際シンポジウムを、2019 年 7 月 27 日に開催することを基軸として研究を推進した。前年度終了時に既に決定していたとおり、ミネソタ大学のアンドリュー・フルコ（Andrew Furco）先生を招聘し、改めて米国におけるサービス・ラーニングの歴史的・文化的・社会的意義の再整理と、高等教育改革の一環として取り組まれてきた日本の状況との比較を行うことができた。

また、上記のシンポジウムを国内唯一の学術的交流団体である日本サービス・ラーニング・ネットワークとの連携のもとで実施したことにより、国際サービスラーニング・地域貢献学会（IARSLCE）の国際イニシアティブ委員会によるワークショップ「サービス・ラーニングと地域貢献に関する国際的な研究課題の設定」を併催（7 月 28 日）した。これにより、人的ネットワークの維持・発展に加えて、今後の研究課題の精緻化を図ることもできた。

加えて、2019 年度もまた立命館大学サービスラーニングセンターのボランティア・サービスラーニング（VSL）研究会との効果的な連動を図った。立命館大学は現在、京都・滋賀（草津）・大阪（茨木）の 3 キャンパスで教学を展開しているため、6 月（草津）、7 月（茨木）、12 月（京都）と、各キャンパスでの実践について比較検討を図る公開研究会を通して、サービス・ラーニングという教授法がもたらすインパクトについて改めて整理・確認する機会を設けた。

その他、各種学術会議での発表機会も得た。研究分担者（秋吉）を責任発表者として前掲の IARSLCE（2019 年度は米国ニューメキシコ州アルバカーキで開催）でのポスター発表をはじめ、対人援助学会のオンライン雑誌「対人援助学マガジン」（季刊）にて 7 月 27 日の国際シンポジウムの紙上採録を兼ねるべく研究代表者がサービス・ラーニングと PBL とを関連づけた連載（37 号～40 号）を執筆した。

2020 年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、2019 年度末に想定していた以上に本研究の計画推進に大きな影響がもたらされた。発表が決定していたデンマークでの国際学会「PAN-PBL（Association of Problem-Based Learning and Active Learning Methodologies）」も 1 年の延期となった他、実践的研究として継続的に足を運んできたフィールドへの往訪も控えることになった上、そもそも対面での対話的な学びを前提とするサービス・ラーニングの教育実践そのものが例年どおりの展開がままならないものとなった。

そこで 2020 年度は、改めて本研究の本質である市民性涵養について、オンラインを活用したネットワーキングとコラボレーションを通じて、COVID-19 下での新たな実践と過年度の取り組みとを比較検討した。特に、サービス・ラーニングの特徴である地域と大学を往還する学びの提供や学生同士の支え合い上でのリスクコミュニケーションについて取り上げる機会を創出した。

実際、例年開催してきた立命館大学 VSL（ボランティア・サービスラーニング）研究会では、年間テーマの「ピアサポート」の観点から、地域団体とのボランティア・コーディネーション活動の意義・課題・展望について、大学間を横断して幅広い参加者のもと、5 回の開催を通して検討した。また、こうした年間を通した連続研究会の展開に加えて、11 月 29 日には JOELN（大学教育における「海外体験学習」研究会）2020 年次大会の開催に協力し、「体験学習を再考する-コロナ禍の経験を踏まえて」というテーマのもと、リアルとバーチャルの二分法に依拠しない学習環境のあり方について各種実践をもとに整理することができた。

一方、日常の教育実践では、2019 年度に本研究のメンバーが出版に貢献した「リフレクション ハンドブック-深い学びと出会うために-」を教育実践に活用した。その知見は日本サービス・ラーニング・ネットワーク（JSLN）の運営メンバーにも共有され、国内ネットワークの維持・発展の一助となった。

なお、研究成果の発表としては、第 27 回大学教育研究フォーラムでの発表や第 22 回国際ボランティア学会などで発表する機会を得た。2019 年度から取りまとめてきたサービス・ラーニングの学習記録（ジャーナル）への評価観点をまとめたルーブリックに関する学術論文を投稿し改稿を重ねた（その後、2021 年度に公刊）他、継続して対人援助学会「対人援助学マガジン」にて参加型学習の理論と方法論に関する連載が続けられた。

2021 年度は 2020 年度に引き続きオンライン環境を活かした実践的研究を展開した。研究フィールドである立命館大学の教育実践では、オンキャンパスでの対面による座学が控えられる中でも、万全の感染対策のもとでのオンサイトでのボランティア活動を通じたサービス・ラーニングの企画・運営にあたり、その活動評価と学習評価に取り組んだ。

あわせて、コロナ禍以前のサービス・ラーニングの受講経験がキャリア形成にどのような影響を与えたかについて、オンラインでのインタビューによる調査を行った。事前に調査の目的と項目を整理した上で、インタビューそのものは日本サービス・ラーニング・ネットワークの年次大

会の分科会と関連づけて公開で実施したことで、関連分野の研究者・実践者のみならず、在学中の学習者からも質問・コメントが寄せられ、内容面でも手法面でも有意義な成果を得た。

これらの調査に加えて、積極的に研究成果の公開にも取り組んだ。具体的には、1 年間の順延の末にオンライン開催となったデンマーク・オールボー大学による PBL の国際学会（PBL2021）、さらに国際サービスラーニング・地域貢献学会（IARSLCE）、それぞれに英語での口頭発表に行った上で、国内学会では研究代表者が実行委員長を務めた国際ボランティア学会第 23 回大会にて本研究で得た知見を反映して大会の企画・運営にあたった。

その他、2021 年度もまた立命館大学ボランティア・サービスラーニング（VSL）研究会との効果的な連動を図り、研究終了年度までの研究の見通しについて確認することができた。また、前掲のインタビュー結果も含め、本研究の進捗を広く周知する機会として、引き続き研究代表者により、対人援助学会のオンライン雑誌「対人援助学マガジン」（季刊）において、サービス・ラーニングと PBL とを関連づけた連載「PBL の風と土」を執筆した。

そして研究終了年度の 2022 年度には、2021 年度に行ってきた口頭発表の内容を論文にとりまとめ、積極的な公刊にあたっていくこととした。研究代表者が国際ボランティア学会の機関誌「ボランティア学研究」第 23 号において特集「越境知としてのボランティア学」の編集を担当したこともあって、結果として共著を含めて複数の論文が掲載されるに至った。収められた論文は、コロナ禍における領域横断型の対人援助に関する各種実践の意義を越境知という視点のもとで報告したものから、東日本大震災の発災から 10 年の実践を俯瞰してボランティア学習や市民性教育（citizenship education）の観点からその意義と課題等について検討したもので、多岐にわたった。

また、前年度から引き続き、対人援助学会のオープンアクセスのオンライン雑誌「対人援助学マガジン」において「PBL の風と土」と題した連載を継続し、年度内発行の 4 号全てにおいて、特に米国で刊行された論文からサービス・ラーニングに関する理論の解題を行った。とりわけインディアナ大学-パデュー大学インディアナポリス校のサービスラーニングセンターを中心に構築された SOFAR モデルや、それらのモデルを通じて設計されるカリキュラムの展開を経て地域にもたらされる変容的関係の特徴に関心を向けた。

加えて立命館大学サービスラーニングセンターによる「ボランティア・サービスラーニング（VSL）研究会」においては、本研究を通じて導かれた知見を今後の組織的な展開に反映できるよう、既刊の論文に対する連続読書会の形式を取り入れ、6 回の公開研究会を企画、実施した。その最終回となる 6 回目には、5 年にわたる研究の成果を広く公表すべく、これまで構築してきた人的ネットワークを活かしたシンポジウムを実施した。

以上、各種調査に加えて成果発表も着実に行うことができ、着実な研究を展開することができた。例えば、2020 年度に成果として取りまとめる予定であったルーブリックの素案については 2021 年度に「ジャーナル・アセスメント・ルーブリック」として整理の上で公刊できた。これにより、いわゆる授業の逆向き設計も可能となり、結果としてサービス・ラーニングにおけるスキルセットの提示の手がかりとしても活用可能となった。また、研究開始時点ではコロナ禍は想定外であったものの、前述の立命館大学のボランティア・サービスラーニング（VSL）研究会にてリスクコミュニケーションをはじめとした管理運営面の注意点にも関心を向け、授業実践に対する充実した調査・分析が進められた。

また、オンラインでの学習環境がコロナ禍を経た「新しい日常」としての教育実践として導入・展開されたことに伴い、当初の計画には含まれていなかった観点ながら、積極的に研究のテーマとして取り上げていったものの、オンラインでの修学を前提としたサービス・ラーニングの推進方法については、コロナ禍の実践とコロナ禍を経た実践との相互比較により、より緻密な検討が求められるところである。具体的には、学生の履修行動の変化、各種ビデオ会議システムを通じた同期型のコミュニケーションのあり方、オンデマンド学習による非同期型の授業運営による現場探究の促進方法など、オンラインでの学習環境を単なる代替手段ではない形で整備・活用するための方策は、さらに精緻な議論が求められるところである。

少なくとも、本研究ではコロナ禍において新規に開講することとなった立命館大学の全学教養科目「現代社会とボランティア」において、受講生が授業開始前と現場でのボランティア活動後との形成的評価のために、AAC&U のメタ・ルーブリックのうち「市民参加」を用いた自己評価を行い、その結果をもとに、コロナ禍での体験学習のあり方について検討した。その結果は前掲の「対人援助学マガジン」の連載において、第 49 号に掲載されている。さらに、学習者自身による体験の言語化を通じた言説を手がかりに、計画調書に盛り込んでいたスキルセットを検討することにした。研究期間は終了したものの、今後、モデルシラバスや成績評価観点の提示、その他教職員の介入（インタラクション・インターベンション）のポイントの明確化、さらには関係性の醸成を図るパートナーとのコミュニケーションのあり方について、引き続き探究していく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計40件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　32件）

１．著者名 山口洋典	４．巻 23
２．論文標題 コロナ禍の中で迎えた東日本大震災からの10年に思いを馳せてー特集「越境知としてのボランティア学」の企画趣旨	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ボランティア学研究	６．最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 今井紀明、宗田勝也、山口洋典	４．巻 23
２．論文標題 ポストCOVID-19における越境的支援のかたち-否定しない／学び続ける-	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ボランティア学研究	６．最初と最後の頁 7-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川原直也、八重樫綾子、赤澤清孝、其田雅美、山口洋典	４．巻 23
２．論文標題 再論・大学と震災とボランティアセンター：国際ボランティア学会第23回大会トークセッション	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ボランティア学研究	６．最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 団 士郎、上野知子、山口洋典	４．巻 23
２．論文標題 『物語』を届け続けた10年が辿り着かせてくれた現在とこれから -企画セッション「物語を届ける」を通じて-	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ボランティア学研究	６．最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂中俊介、蔵田 翔、佐藤すみれ、山口洋典、横関つかさ	4．巻 23
2．論文標題 コロナ禍における居場所づくり：越境知としてのボランティア学を求めて	5．発行年 2023年
3．雑誌名 ボランティア学研究	6．最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 秋吉恵、森田恵、奥貫麻紀、秦憲志	4．巻 23
2．論文標題 大学生の地域活動は地域に何かをもたらし得るのか？－活動に関わるアクター間の関係性からの考察－	5．発行年 2023年
3．雑誌名 ボランティア学研究	6．最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 上田隼也、宮下聖史、山中司	4．巻 45
2．論文標題 オンラインを活用した教育プログラムにおけるSDGsスキル調査	5．発行年 2022年
3．雑誌名 社会システム研究	6．最初と最後の頁 199-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00017750	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 49
2．論文標題 PBLの風と土：(21)自己と社会の関係性を市民性向上で醸成	5．発行年 2022年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 207-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 50
2．論文標題 PBLの風と土：(22)大学と地域が共に見上げる北極星として	5．発行年 2022年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 209-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 51
2．論文標題 PBLの風と土：(23)協力的な関係にて学びと成長の旅仲間に	5．発行年 2022年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 166-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 52
2．論文標題 PBLの風と土：(24)よりよい地域のために大学は地域と共に	5．発行年 2023年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 176-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口 洋典・北出 慶子・遠山 千佳・村山 かなえ・安田 裕子	4．巻 22
2．論文標題 トランスビューからマルチビューへの展開を通した経験の物語化への方法論：ボランティア体験の言語化を促進する実践的研究へアプローチとして	5．発行年 2022年
3．雑誌名 ボランティア学研究	6．最初と最後の頁 97-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木村充・河井亨・山口洋典・秋吉恵・宮下聖史	4．巻 22
2．論文標題 経験学習型教育における「書くこと」を通じた学生の学び― 立命館大学サービス・ラーニング科目におけるリフレクティヴ・ライティング ―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 立命館高等教育研究	6．最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00017161	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 秋吉恵・小峯茂嗣・藤掛洋子・磯野昌子・田中治彦	4．巻 22
2．論文標題 海外体験学習における第3の道：オンライン実践－コロナ禍で実施されたNGOとの協働事例から－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 立命館高等教育研究	6．最初と最後の頁 37-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00017158	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 河井亨	4．巻 44
2．論文標題 大学生におけるセルフ・オーサーシップの成長理論 ： 成長理論のなかの位置づけおよび成長経路と影響要因の析出	5．発行年 2022年
3．雑誌名 社会システム研究	6．最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00016131	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 河井亨	4．巻 43
2．論文標題 大学生におけるリーダーシップ成長理論の検討 ： 成長理論から見た特長と分岐点の析出	5．発行年 2021年
3．雑誌名 社会システム研究	6．最初と最後の頁 59-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00015278	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 宮下聖史	4．巻 3
2．論文標題 地域づくりにかかわる学びの意味の探求：「べき論」からの脱却を目指して	5．発行年 2022年
3．雑誌名 島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報	6．最初と最後の頁 36-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 宮下聖史	4．巻 355
2．論文標題 自治体別に見た人口増減の諸側面とライフキャリアにおける地域の選択に関する考察 ： 人口減少下での地方・農山村生活の社会的意味(2)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 信州自治研	6．最初と最後の頁 7-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮下聖史	4．巻 354
2．論文標題 地域おこし協力隊のライフキャリアと地域協働 ： 人口減少下での地方・農山村生活の社会的意味(1)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 信州自治研	6．最初と最後の頁 10-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 48
2．論文標題 PBLの風と土：(20)変容的関係での学習環境で学びと成長を	5．発行年 2022年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 201-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 47
2．論文標題 PBLの風と土：(19)適度な親密さで公正・誠実な関係構築を	5．発行年 2021年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 196-201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 46
2．論文標題 PBLの風と土：(18)活動させる教育を共に場をつくる学習へ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 207-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 45
2．論文標題 PBLの風と土：(17)地に吹く風と土に寄せる波が境を越える	5．発行年 2021年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 243-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村山かなえ、北出慶子、遠山千佳、安田裕子、山口洋典	4．巻 21
2．論文標題 国際教育交流が育む学生ピア・サポートの多様化-多文化サービスラーニングの可能性を巡って-	5．発行年 2021年
3．雑誌名 立命館高等教育研究	6．最初と最後の頁 139-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00014609	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 44
2．論文標題 PBLの風と土：(16)身体性を重視して異文化対応に身構えを	5．発行年 2021年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 206-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 43
2．論文標題 PBLの風と土：(15)所属の獲得と相互承認による学びと成長	5．発行年 2020年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 206-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 42
2．論文標題 PBLの風と土：(14)学びの集団の成熟を通じた個々人の成長	5．発行年 2020年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 216-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 41
2．論文標題 PBLの風と土：(13)安定的な行動・状況の背景に根ざす信念	5．発行年 2020年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 197-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 40
2．論文標題 PBLの風と土：(12)手続きや内容より関係構築にこそ重点を	5．発行年 2020年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 197-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 31(3)
2．論文標題 地域参加学習において言語化を促進する意味とその方途	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館言語文化研究	6．最初と最後の頁 73-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00013450	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 39
2．論文標題 PBLの風と土：(11)自らの未知なる環境に身を置いてみよう	5．発行年 2019年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 180-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 38
2．論文標題 PBLの風と土：(10)穴を埋めるのではなく良い点を伸ばして	5．発行年 2019年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 208-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典・赤澤清孝・深尾昌峰	4．巻 106
2．論文標題 大学地域連携による学生住民の地域混住を通したコミュニティの活性化	5．発行年 2019年
3．雑誌名 都市住宅学	6．最初と最後の頁 14-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 37
2．論文標題 PBLの風と土：(9)サービス・ラーニングは中道を歩むもの	5．発行年 2019年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 207-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 9(4)
2．論文標題 PBLの風と土：(8)指導の不安と不満で学生を抑えぬように	5．発行年 2019年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 240-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山口洋典	4．巻 19
2．論文標題 参加型学習における問題解決活動と教育実践の相即：立命館大学とデンマーク・オールボー大学との比較研究を通じた理論と方法論の検討	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ボランティア学研究	6．最初と最後の頁 7-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口洋典・桑名恵・阿部健一・竹端寛・玉城直美・福永敬・高橋真央	４．巻 19
２．論文標題 メゾレベルなボランティア学を求めて：特集「主体的な学びを拓くボランティア学」の企画趣旨	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ボランティア学研究	６．最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口洋典	４．巻 9(3)
２．論文標題 PBLの風と土：(7)どのように問題を設定するかという問題	５．発行年 2018年
３．雑誌名 対人援助学マガジン	６．最初と最後の頁 223-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口洋典	４．巻 9(2)
２．論文標題 PBLの風と土：(6)学びの場のプロセスをデザインする戦略	５．発行年 2018年
３．雑誌名 対人援助学マガジン	６．最初と最後の頁 282-287
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口洋典	４．巻 9(1)
２．論文標題 PBLの風と土：(5)現在進行形の問題に向き合う学びの視点	５．発行年 2018年
３．雑誌名 対人援助学マガジン	６．最初と最後の頁 282-287
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計27件（うち招待講演　2件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 山口 洋典、矢守 克也、鮫島 輝美、Patricia Leavy
2．発表標題 実験・実践のリアリティと社会のアクチュアリティ：再現可能な一般性の発見と個別性からの普遍性の追求のあいだで
3．学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会 第68回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 北出慶子、澤邊裕子、中川祐治、早矢仕智子、遠藤知佐、西村聖子、川田麻記、牧田東一、佐藤弘子、山口洋典
2．発表標題 地域と大学の連携で「つながる」を越えて何を目指すのか？一日本語学習支援・多文化交流における地域と大学の変容型パートナーシップに向けて一
3．学会等名 言語文化教育研究学会第9回年次大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 Hironori Yamaguchi, Kanae Murayama, Keiko Kitade, Chika Tohyama, Yuko Yasuda
2．発表標題 The process of learning and growing of peer supporters through place management: for curriculum and co-curriculum hybridization
3．学会等名 PBL2021 International Conference（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 香川秀太・山口洋典・宮本匠・大石尚子・荒川歩
2．発表標題 資本主義-ポスト資本主義の境界領域を問う：心、実践、社会システムのあいだ
3．学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第67回大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 香川秀太・宮本匠・山口洋典・大石尚子・日比野愛子・無藤隆
２．発表標題 資本主義とポスト資本主義の境界領域を探る：政策、美的科学、政治哲学のあいだ
３．学会等名 日本質的心理学会第18回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hironori Yamaguchi, Megumi Akiyoshi, Toru Kawai, Seishi Miyashita
２．発表標題 How Service-Learners Deepen Their Relationships and Design Their Lives: Introducing the Metaphor of Earth, Wind, and Waves in Disaster Revitalization Programs
３．学会等名 IARSLCE 2021 Virtual Gathering（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hironori Yamaguchi, Kyoko Ichikawa, Atsuko Kuronuma, Takeshi Miyazaki
２．発表標題 Creating a Future of Service-Learning in Japan: Reviewing Political Context and New Mission of Engaged Campus
３．学会等名 IARSLCE 2021 Virtual Gathering
４．発表年 2021年

１．発表者名 赤澤清孝・其田雅美・川原直也・山口洋典
２．発表標題 パネルディスカッション「再論・大学と震災とボランティアセンター」
３．学会等名 国際ボランティア学会第23回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 今井紀明・宗田勝也・山口洋典
２．発表標題 キーノートスピーチ「ポストCOVID-19における越境的支援のかたち」
３．学会等名 国際ボランティア学会第23回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 秋吉恵・森田恵・奥貫麻紀・秦憲志
２．発表標題 大学生の地域活動は地域に何かをもたらし得るのか？：活動に関わるステークホルダー間の関係性からの考察
３．学会等名 国際ボランティア学会第23回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 北出慶子・遠山千佳・山口洋典
２．発表標題 言語文化的マイノリティの支援を通したE-サービス・ラーニングモデルの開発
３．学会等名 第22回国際ボランティア学会学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡島克樹・齋藤百合子・大川貴史・箕曲在弘・山口洋典
２．発表標題 体験学習を再考する－コロナ禍の経験を踏まえて
３．学会等名 大学教育における「海外体験学習」研究会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 北出慶子・遠山千佳・村山かなえ・安田裕子・山口洋典
２．発表標題 ナラティブを通した意味生成における多声的空間の場とその意義－国際交流学生スタッフ経験についてのTEM（複線径路等至性モデリング）図を通したマルチビュー・ダイアローグの試み－
３．学会等名 日本質的心理学会第17回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 日比野愛子・宮本匠・山口洋典・大石尚子・香川秀太・河合直樹
２．発表標題 ポスト質的心理学とこれからのアクションリサーチ－世界的危機の恒常化時代を迎えて－
３．学会等名 日本質的心理学会第17回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 秋吉恵・藤掛洋子・小峯茂嗣・磯野昌子・田中治彦
２．発表標題 市民とつながる海外体験学習―オンライン実践からこれからの体験学習を考える―
３．学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 兵藤智佳・岩井雪乃・平山雄大・二文字屋脩・和栗百恵・佐野香織・河井亨
２．発表標題 「体験の言語化」実践におけるオンラインの課題と可能性
３．学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 北出 慶子・香川 秀太・山口 洋典・義永 美央子
２．発表標題 越境による「第三の知」創造を目指した実践―交差と衝突による変容から言語文化教育の展望を考える―
３．学会等名 言語文化教育研究学会第6回年次大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口洋典・北出慶子・遠山千佳・村山かなえ
２．発表標題 多文化理解を促すための中動的言語文化と表現の可能性～Story Circlesを通じた対話的理解の省察的実践～
３．学会等名 国際ボランティア学会第21回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Megumi AKIYOSHI, Hironori YAMAGUCHI, Toru KAWAI, Mitsuru KIMURA, Seishi MIYASHITA
２．発表標題 Helping learners verbalize their experiences by improving daily writing habits through a reflective and active service-learning curriculum
３．学会等名 2019 IARSLCE Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山口 洋典・山口(中上) 悦子・香川 秀太
２．発表標題 ワークショップ「ポスト活動理論のパフォーマンス：越境する地域コミュニティと学習する医療の交歓」（話題提供スライドタイトル：災害復興過程におけるメタファーの導入がもたらす集団力学の変容～新潟県中越地震後の新潟県小千谷市塩谷集落での10年のアクションリサーチから～）
３．学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第66回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hironori Yamaguchi, Tomohide Atsumi and Yoshihiro Seki
２．発表標題 Sense making Metaphorical Thinking on Networking in Disaster Revitalization : From the Narratives of 10 Years Activity in Shiodani village, Ojiya, Niigata Japan
３．学会等名 The 10th conference of the international society for Integrated Disaster Risk Management (IDRiM 2019)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 日高 友郎、木戸 彩恵、辻内 琢也、増田 和高、齋藤 清二、山口 洋典
２．発表標題 震災経験の意味を考究することは被災者支援にどのようにつながるか？
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 北出慶子・遠山千佳・平野莉江子・村山かなえ・山口洋典
２．発表標題 コミュニティ間を有機的に繋ぐ人材育成を目指して―サービスラーニング、多文化間 教育、地域日本語教室での実践省察から考える市民性教育に向けての現実と課題―
３．学会等名 言語文化教育研究学会第5回年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 カルロス・ペリス、狩野剛、堀江正伸、山口洋典、桑名恵、藤掛洋子
２．発表標題 学生とともに紡ぐわたしたちの未来：「教育とICTの可能性」「多文化共生・難民」「社会企業/起業」「NPOの未来」「ジェンダーと開発」
３．学会等名 国際ボランティア学会第20回大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山口洋典・髙橋真央・桑名恵・玉城直美・阿部健一・竹端寛
２．発表標題 ボランティア学研究（の未来）を読む
３．学会等名 国際ボランティア学会第20回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山口（中上）悦子・山口洋典・香川秀太
２．発表標題 越境的対話のグループ・ダイナミックス：活動理論のその先をめぐって
３．学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第65回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hironori YAMAGUCHI, Megumi AKIYOSHI, Toru KAWAI, Mitsuru KIMURA, Seishi MIYASHITA
２．発表標題 Cultivate writing habit for the reflective and active learner in service-learning curriculum: by presenting prompts and 3 principals
３．学会等名 International Association for Research on Service-Learning & Community Engagement (IARSLCE) 2018 Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 秋元みどり、秋吉恵、市川享子、山田一隆	４．発行年 2019年
２．出版社 青山学院大学サービス・ラーニング・パイロットプロジェクト	５．総ページ数 42
３．書名 リフレクション ハンドブック－深い学びと出会うために－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

地域連携・協働型授業による問題解決の実践-びわこ・くさつキャンパスと草津市内の活動の事例から-
http://www.ritsumei.ac.jp/slc/local/column/detail.html/?id=32
2019年度　ボランティア・サービスラーニング(VSL)特別公開研究会　ご案内
http://www.ritsumei.ac.jp/slc/event/detail/?id=277

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	河井　亨 (Kawai Toru) (20706626)	立命館大学・スポーツ健康科学部・准教授 (34315)	
研究分担者	秋吉　恵 (Akiyoshi Megumi) (00580680)	立命館大学・共通教育推進機構・教授 (34315)	
研究分担者	宮下　聖史 (Miyashita Seishi) (70755511)	島根県立大学・地域政策学部・准教授 (25201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
第4回日本サービス・ラーニング・ネットワーク全国フォーラム	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関